

『ワイワイガヤガヤ』で結束強化

SDGs 貢献が企業の背骨

「より一層、風通しの良い、強い企業とするため、『ワイワイガヤガヤ』と意見を出し合って絆を深めていきたい」。2019年に先代・雅浩氏の急逝に伴い社長に就任し、4月に創立100周年を迎えた株木建設の株木康吉社長はこう語る。これまで歩んできた『株木の道』と次の100年に向けての道筋を聞いた。

エコプラントで売電、他地域に拡大



株木 康吉社長

登場で戦争の形態が大きく変わっていくことが予想された。海軍はこの潮流を見据え茨城県土浦市に霞ヶ浦海軍航空隊の飛行場建設を計画した。同社は、この建設工事に、荒川沖から霞ヶ浦までの資材運搬で携わった。交通網が十分に整備されていない中で大量の資機材を運搬するため、政一は鉄道駅から線路を敷いて牛にトロツコを引かせるといった方法を思い付く。このアイデアが海軍に認められ、それ以降、全国22カ所の飛行場建設に携わった。

霞ヶ浦の飛行場建設

1921年4月に株木政一が土木請負業「株木工業所」を立ち上げて最初の一步を踏み出した。時は第1次世界大戦直後、飛行機の

株木建設



第2次世界大戦後も霞ヶ浦とともに歩みを続ける。「軍事に代わり、食糧難の中で農地確保のため、霞ヶ浦の干拓事業に関わり、霞ヶ浦農科大学（現茨城大農学部、私立霞ヶ浦高校）の創立にも関与した」。戦後間もない日本全国の災害復旧工事やダム工事、電源開発工事も手がけた。岩手県の葛根田川の電源開発では高熱下でのトンネル掘削となった難工事だったが

無事完遂した。こうして政一は株木建設の礎を築くとともに株木グループの拡大を進めた。53年に2代目・正郎が就任すると、高度経済成長期の中で建築事業も軌道に乗り、土木・建築の両輪で事業を拡大していった。先代・雅浩氏が社長に就任したのは89年4月。『建設業冬の時代』と称され建設業の倒産が相次ぐ中、「みんなで集まって議論して進むべき方向を決めていった」と語る。そして「グループは規模縮小を迫られながらも、企業体制を筋肉質に変えていった」

デジタルでKCS進化

霞ヶ浦の開発を始め、株木家に受け継がれるのは「困っている人々を助け、生活の根幹を支え、社会に貢献する」という意識だ。康吉社長自身も「地域の人々に評価されることで会社は成り立っている。地域との信頼関係を大切に、株木建設の活動に共感し、より愛着を持ってもらえようように会社運営をしたい」と語る。この考えが「循環型社会をサポートする事業を展開する現在のグループ全体の礎となっている」。まさにSDGs（持続可能な開発目標）達成への貢献こそが企業の背骨であり、「人々の心豊かな生活に寄り添うことで社会に貢献する」という企業理念が確実に息づいている。2050年カーボンニュートラルの目標が示される中でも「循環型社会の構築に貢献したい」と意気込む。



かつての銀座の本社ビル

具体的に取り組むも始まっている。グループ会社の日立セメントは、家庭の生ごみや事業系食品廃棄物を発酵



甲府飛行場建設工事にも携わった

変化を楽しむ人材育成

させ、メタンガスを生成して焼却用燃料に使用するバイオ・エコプラントを運営しており、「5月には株木建設の施工で発電用のメタンガス発酵槽を増設し、売電を始めた。ノウハウを蓄積して他地域での建設運営にも取り組みたい」と次の事業の芽も生まれている。

研修に投資惜しまず

「次は社会貢献の姿勢を支えたのが、厳しい時代を乗り越える力となった『風通しの良さ』だ。康吉社長はこの強みを引き継ぎ、『ワイワイガヤガヤ』をキーワードに挙げ、「協力会社を含め、グループ全体の一人ひとりが自ら考え、行動して、意見を出し合い、絆を深めていきたい」と結束力強化にまい進する。コロナ禍によるテレワークの拡大などで対面の機会が減っているものの、「建設業は自然が相手。どんなにAI（人工知能）やロボットが発展しても人の磨き上げた発想力が求められる場面が必ず出てくる」と絆が生む力を信じて疑わない。

さらに先を見据え、『時代に即して変化を楽しむ』を採用ビジョンに掲げた。「これまでも時代に合せて業務を変化させてきた。変化を恐れず、自己スキルを上げることを楽しめる人、失敗を恐れず挑戦する人、仲間を大切にできる人、やりがいを見出さずして次のステップに進める人を求めている」という。

「協力会社もその一員であり、『協力会』『親政会』が発足60年を迎え、若手経営者の会も立ち上がった。デジタル技術の活用なども含めてサポートしながら、作業の一層の効率化を進め、より関係を強固にしたい」と語る。

社会への貢献という根幹を守りつつ、『ワイワイガヤガヤ』で絆を深め、変化を楽しみながら成長する。同社は次の100年へ着実に新しい一步を踏み出している。

新しい企業ロゴマーク制定

株木建設は、創立100周年を機に新しい企業ロゴマークを制定した。赤い丸が「すべての生命を明るく照らす太陽」を示し、緑は「大地に根を張り、成長する芽」、黄土色は「情熱をたたえながら粘り強くやり遂げる永い道のり」を表す。「新しい道を切り開く開拓者のイメージを示した」という。



新ロゴマーク

東京・目白の新社屋、来夏着工

同社は、東京・目白に東京本社の新社屋を建設する。規模は7階建て延べ約3,000平方メートル。現在設計中で、2022年6月の着工を想定しており、24年4月の入居を目指す。窓ガラス・外壁の高断熱化や高効率空調の採用、太陽光発電の設置などZEB化技術をふんだんに導入する。このほか、執務室への憩いのスペースやミーティングルームの設置など、若手社員にヒアリングして動きやすい環境整備を進める。

株木建設100年の歩み

1921年	株木政一が土木請負業創立
1948年	株木建設株式会社に商号変更
1958年	株木正郎が社長就任
1964年	札幌、仙台、水戸、東京、名古屋に支店を開設
1965年	大阪支店を開設
1975年	日本建設業団体連合会に加入
1977年	九州支店を開設
1989年	株木雅浩が社長就任
1998年	水戸支店新社屋完成
2000年	機構改革に伴い水戸支店を茨城本店に改組
2002年	つくば支店を開設
2004年	北関東支店を開設
2008年	本店を水戸市に移転
2008年	KCS改善活動をキックオフ
2019年	株木康吉氏が社長就任

最後は人の力を大切にすることも、デジタル化の変革は進めなければならぬ。08年から、改善活動で現場状況や業務を可視化するKCS（カブキ・コンストラクション・システム）の構築に力を入れてきた。今後は「成功事例・失敗事例をデータとして蓄積し、他現場でも有効活用するようデジタル化していきたい」とKCSの進化を目指す。6月には3次元測量などの最新技術を手掛ける「ICT・現場支援室」も設置した。「CIM／BIMも含め、水平展開できる体制を整えたい」と意図を説明する。

